

加藤清正の実像

慶長8年(1603)に征夷大將軍となった徳川家康は、同10年に息子・秀忠に將軍職を譲った後も大御所として政治の実権を握っていました。世はずでに徳川の治世となっていました。大坂城には豊臣秀吉の息子・豊臣秀頼とその母・淀君が健在で、家康にとっては無視できない存在でした。

〈23〉二条城の会見と清正の死

慶長5年の関ヶ原の戦い後、豊臣家はそれまで領地としていた全国220万石の直轄地を家康によって召し上げられ、畿内の一部65万石を与えられ、一大名に転落します。しかしながら、その政治的地位は徳川家と並ぶほどに高く、特に親豊臣系の大名に対しては依然として強い影響力を持っていたと考えられます。この時期の政治体制を「二重公儀体制」と位置付けて、江戸の徳川家と大坂の豊臣家という二つの公儀(政治権力)が併存していたと見る研究者もいます。このような他の大名家とは別格に位置する豊臣家に対して家康は、慶長8年に孫娘の千姫を秀頼に嫁がせるなど、豊臣家との融和を図り、安定的な関係を築きます。その後、家康は秀頼との面会を度々求めますが、家康に対して警戒心を抱く母・淀君の反対でなかなか実現しなかったと言われています。

しかし、慶長16年3月に後水尾天皇の即位行事のため上洛した家康は、大坂城の秀頼にも上洛を求め、ついに3月28日に二条城において両者の対面が実現します。従来、この会見では徳川家の政治的優位性を誇示するため、家康が秀頼に対して臣従の態度を強制したと言われていますが、実際には家康は秀頼を厚遇する態度を見せています。これは両家の対等関係や融和を示すことで親豊臣系大名、言い換えれば反徳川大名を懐柔する意図があったようです。

この歴史的会見に、同席を許された数少ない大名の一人として清正も名を連ねています。この会見時の清正の行動については、清正死去直前のハイライトとしてよく知られていますが、実際にはどのように会見に関わったのでしょうか。後世にできた伝記「清正記」には、大坂城から京都へ上る淀川の兩岸を清正と浅野幸長の家臣たちが厳重に警備して、清正は二条城に着くまで秀頼の側を少しも離れずに護衛したと書かれています。しかし、同時代の史料には、清正は鳥羽で秀頼を出迎える使者として家康により派遣された当時9歳の徳川頼宣(家康10男)の後見役として名前が見えます。清正は、大坂から京都の二条城まで終始秀頼に寄り付き添っていたわけではなく、頼宣の御供役とし

て二条城の会見に参加を許されていたことが分かります。つまり、清正は秀頼を護衛する豊臣家側の人物としてではなく、あくまで徳川家側の人物として会見に同席したわけです。頼宣は清正の娘婿に当たる人物ではありますが、家康が会見に親豊臣系大名の筆頭とも目される清正を人選した背景には、やはり徳川家・豊臣家双方に目配りができる人物は清正しかいないという家康の政治的配慮があったのでしょう。当時の清正が重要な政治的立場にいたことが良く分かります。当時、12年ぶりとなる秀頼の上洛は京都の民衆の中でも非常に話題となり、その行列見たさに市中は騒然となったようです。秀頼が乗る駕籠を群集や見物人から守るため、清正は鳥羽から二条城までは秀頼近くにおいて、護衛していた可能性は十分にあります。会見終了後に秀頼は大坂への帰途、伏見にある清正の屋敷に立ち寄り、饗応を受けています。おそらく、秀頼が淀川を下る船に乗るまでは、清正が秀頼護衛の任を担ったのでしょう。結果的に、これが清正最後の大事な仕事になってしまいます。

会見終了後、清正はしばらく京都に滞在して、茶会や能鑑賞を楽しんだ後、5月2日に大坂を出航して肥後に向かっています。肥後へ向かう船中で発病したとも言われていますが、萩藩毛利家が収集した情報によれば、清正は5月15日に熊本に到着した後、27日に熊本城の大広間で発病したとされています。病名は定かではありませんが、突発的な発病と「舌不自由」などの症状が見られたことから脳内疾患だったと推測されます。治療の甲斐もなく、慶長16年6月24日に自身が築き上げた熊本城で50年の生涯に幕を閉じます。清正死去直後から家康による毒殺説も噂されていたことが、イエズス会宣教師の報告書から窺えますが、大坂を出てから症状が出るまでかなりの時間が経っているため、毒殺の可能性は極めて低いと言わざるを得ません。

死後、熊本城下を西から見下ろす中尾山中腹(現在の本妙寺山)に廟所が造営され、清正の亡骸はそこに葬られました。

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

